



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

特集

## 光るどろだんごは なぜ楽しい？

vol. **18** | 季刊 **冬**  
2011



表紙写真

「1, 2, 3…」と壁面の模様をつくるクレイペグを数えているお子さんたちに出会いました。「光るどろだんごをつくりたくて」岡崎からいらしたそうです。クレイペグを手づくりする映像にも感心しきりでした。(世界のタイル博物館1階クレイペグによる壁空間)

(2010.11.14)

撮影：加藤弘一

## [特集] 光るどろだんごはなぜ楽しい？

- 02 光るどろだんごを語ろう。
- 03 光るどろだんご、その魅力を解き明かす。
- 06 光るどろだんごの魅力とは。 北神慎司さん

### LIVE SCHEDULE

- 07 これからの催し  
企画展 19世紀の幸せなものづくり  
ウィリアム・ド・モーガンがタイルに残したメッセージ  
関連セミナー開催報告  
光るどろだんご 冬の星空  
モザイクアートコンテスト2011

### LIVE REPORT

- 08 開催報告  
光るどろだんご全国大会2010  
COP10 参加者、光るどろだんごづくりに挑戦  
陶と灯の日 過去への感謝。未来への希望
- 09 高島屋所蔵 岡本太郎のタイル画修復・蘇生プロジェクト  
第11回 ムジカセラミカ定期公演 in 常滑窯のコンサート vol.12

## 常滑から\*

17

## 老兵がんばる



常滑の街の魅力のひとつに、点在する古い建物との出会いがあります。路地を歩きながらふと発見するそれらの建物の多くは、「兵(へい)ご(ご)が夢(ゆめ)の跡(あと)」です。思わず立ち止まってタイムスリップしてしまいます。ミュージアムの近くにあるこの建物は昭和初期に建てられた町工場ですが、創業は天保年間(1800年頃)といわれ、その時々求められたやきものを一つ一つてきました。古い建物を大切に守り、地道にもものづくりをしてきた人たちの心意気が感じられます。

薦(すす)にのっとられたようなこの建物の外観は、四季それぞれに絵になります。春の芽吹きにはじまり、夏は緑に覆われ、下を流れる小川とともに涼やかさを演出します。秋には紅葉し、緑から黄、赤のグラデーションが見えます。冬には葉をすっきり落とした藁(わら)が静かに春の訪れを待ちます。そんな自然の移ろいや感傷とは無関係に、時々煙突から煙が上がり、機械の音や人々の声も聞こえ、ものづくりは確実に行われています。

竹多格 (主任学芸員)

\* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



## 光るどろだんごはなぜ楽しい？

特集

土・どろんこ館の開館以来、延べ6万7千人が体験した「光るどろだんごづくり」。「楽しかった、また来ます!」と寄せられる皆さんの声を励みに、今日も、黙々とだんごの準備をするスタッフですが、ふと立ち止まって考えました。人は、光るどろだんごのどこに魅力を感じるのか、と。そこで始まったインタビューとアンケート大作戦。心理学のご専門、名古屋大学大学院の北神慎司先生のご協力のもと、光るどろだんごの魅力を徹底解剖すべく、初の試みに取り組みました。

# 光るどろだんごを語ろう。

まずは、インタビュー。  
光るどろだんごづくりが大好きなリピーターの皆さんから、初心者\*の皆さんまで、「光るどろだんごのことが好き」を語ってもらいました。熱い思いから、新鮮な感想まで、主な意見を紹介します。

\*ここでは、「リピーター」は3回以上の経験者、「初心者」は2回までの経験者としています。

磨いていると気持ちよくなった。ざらざらなのが光って、誰かさんに魔法をかけられてみたいだった。  
(7歳女子 体験回数1回)

光るのでとても夢がある。子どもやみんなと一緒に同じ時間を過ごせるのがいい。だれがつくっても、ちゃんどできる。子どもの方が上手な時もある。あつて楽しい。  
(30歳女性 体験回数4回)



自分で手を動かしてツヤを出すところが楽しい。自分で全部やりたい。前よりもっとうまくつくりたいと思う。つくっただんごは机に飾って毎日見ている。  
(9歳女子 体験回数2回)



ものがつくれるのは、やっぱりいい。少しずつできてくるところが楽しい。焼いて光沢を出すのかと思っていましたが、自分で磨いて光ってくるのはおどろきだ。土って面白い。  
(60歳代男性 体験回数1回)



最初は「たかがどろだんご」となめていたが、はまってしまった。一番は、できあがったときの美しさと、つくる楽しさ。  
同じもののように1回1回違う。削りすぎたり、クスマが早かったり、それはそれで面白い。気温でも、天気でも違って、奥が深い。最初から最後まで、シンプルで、全部を自分でできるのがいい。  
リピングに特製の棚をつくって、光るどろだんごを並べて楽しんでいる。  
(39歳男性 体験回数8回)



## 本気になる。

丸くならないと気が済まなくなる。色づけの最初の段階では、どうやっていくのか想像ができない。ちょっとまだらにしたいと思ったんだけど、色をつけた時はまだらにならなかった。でも磨いていたらまだらになった。その

## 予想外の変化が楽しかった。

やってみるとこんなふうになるんだという驚きがある。  
(35歳男性 体験回数1回)

がんばって磨くと光るところが好き。きれいな色がついてくるのも楽しい。やっているときは、光るといいなって思いながらやっている。  
(10歳女子 体験回数10回)

自分だけのオリジナルのどろだんごが作れるところがいい。  
最後の磨きのところが好き。  
思ったより光ってくる。もっともっとつくりたいという気持ちになる。  
(11歳男子 体験回数5回)



ザラザラな土の手触りがだんだん変わってくるのがいい。削って丸くしていくところ、「今に光れ」と願いながら磨いている途中、「光り出したな」という時―すべての過程に没頭できて、ストレス発散になる。  
(40歳女性 体験回数5回)

最初やりはじめたときは気のりしなかったが、やっているうちに思っていた以上に光って感激した。瓶で磨けば磨くほど光ったことと、色塗りが楽しかった。またやってみたくてすぐ集中してできた。  
(23歳男性 体験回数1回)



北神 慎司  
KITAGAMI Shinji

1974年岡山県倉敷市生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(教育学)。現在、名古屋大学大学院環境学研究所心理学講座准教授。専門は、認知心理学および応用認知心理学。

# 1

## Motivation 動機づけ

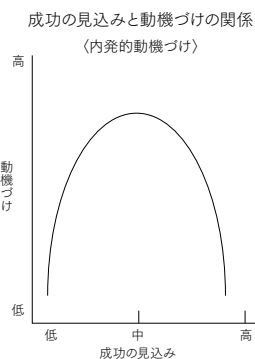
好きだからつくる

実施したアンケート総数166件、インタビュー40名(うち小学生以下13名)。そこから、光るどろだんごの何が見えてきたのか。浮かび上がったのは4つのキーワード。それぞれについて北神先生が心理学的概念からアプローチします。

「もらっただんごを、きれいな球にしていけるのが楽しかった。没頭できた。やればやるほどよくなる。球の形になるところはずっとやってきたかった。時間を制限されずに満足するまでやってみたい。最初から最後まで自分でできるのも楽しかった。」  
(43歳男性 体験回数1回)

最初に北神先生が示したキーワードは「動機づけ」。

人が何かをしようという動機づけは、内発的動機づけと外発的動機づけの2つがあると、北神先生。「内発的」とは自らの知的な好奇心から生まれるもので、インタビューを見ると、かなりの人が、面白いからやってみたく



出典：北尾倫紀彦・速水俊彦  
1986年「わかる授業の心理学」有斐閣

という自らの好奇心で取り組んでいるのがわかります」。

ではなぜ、光るどろだんごは、内発的動機づけを高めるのか。

「グラフを見てください。人は成功の見込みが低い、つまりむずかしくて到底成功する見込みが薄いものにはやろうという気持ち起きにくい。逆に成功の見込みが高い、つまり簡単すぎてもやる気が起きない。中程度のものが内発的動機づけを一番高めます。

光るどろだんごは、まさしくそこに当てはまります。誰もがゴールにたどり着ける。でも到達するためには根気や努力もそれなりに必要。内発的動機づけにびったりと合う。作業の過程で少しずつ光ってくる、そういうフィードバックが常にあるのも、がんばってやろうと思えていいですね。

工夫したり修正したり、小さな目標を次々とクリアして、最終的にきれいなどろだんごをつくるという大きな目標を達成していく。そこに多くの人が魅力を感じているのだ。「こうやって、だんだんきれいになるのが皆さんうれいみたい。がんばった分、応えてくれるのがいいのかもしれないね」という、日頃から体験者と接している講師の感想は、それを表している。「人から言われてやるのは長続きしない、学校の勉強をみても明らかだよ」と北神先生。「アンケート結果もほめられるからやるといって回答はあまり多くない。ほめられることを目的としていない光るどろだんごづくりは、純粋に自ら好きで、楽しんでつくっていることを証明しています」。



# 3

Memory  
記憶

## 懐かしさへの共感



日々、光るどろだんごづくりを指導する講師たち。「集中力が高まっているな」「喜んでもらっているな」と教室の空気を肌で感じている。そんな講師へのインタビューで浮かび上がったのが、教室が親子のコミュニケーションの場になっているということ。中でもこんな意見が、「子どもを連れてくる親も、その親世代の人たちも、子ども時代にどろだんご遊びをしていて、その体験がコミュニケーションになっている。小さい頃土を丸めて遊んだ、でもその時のどろだんごとはぜんぜん違う。色がつけられて、光る、すごいね。親子共通の話題になる。日本人には誰にも土のどろだんごの記憶があって、それが文化として受け継がれているのかなと思う」。

北神先生は、3つ目のキーワードとして「記憶」を挙げた。「どろだんごを通して子どもの頃を思い出す。どろんご遊びをしたこと、当時の友だち、母親の様子…いろいろな思い出が数珠つなぎによみがえってくる。懐かしい気持ちに包まれて、ほんわかした気分になる。推測ですが、だんごをつくる行為というのはどの国にもあると思います。ただ日本は、多くの人が、遊びの中でそれを光らせていた。その体験とともに、子どもたちとここに来る方がいるのです」。

「童心にかえった」「思い出ができた」。そうした体験が「思い出」という記憶となって、それをもとに、また家族で話が盛り上がる。光るどろだんごづくりは、優しい時間をもたらしている。

「思った以上にうまくできた。土に触れて子どもの頃を思い出した。童心にかえる体験。」  
(31歳男性 体験回数1回)

# 2

Sensibility  
感性

## 美しさの魅力



光るどろだんごの魅力で、その色や、形、輝き、手触りを挙げる人は多い。それを北神先生は「感性」というキーワードで表した。

「アンケートでは、光るどろだんごどこに魅力があると思うか、光沢・色・形(真ん丸)・土とのふれあい、で聞いています。光沢の美しさを挙げる人は、リピーター、初心者との区別なく多い。色の楽しさを挙げるのはリピーター。全色揃えたいという声もありましたね。インタビューで手触りの変化を挙げる人も多かった」。

そう、講師がちゃんと見ていて、こんな感想を語ってくれた。「手触りが変わってくるのも魅力の一つだと思う。指先やほっぺで感触を楽しんでいる人

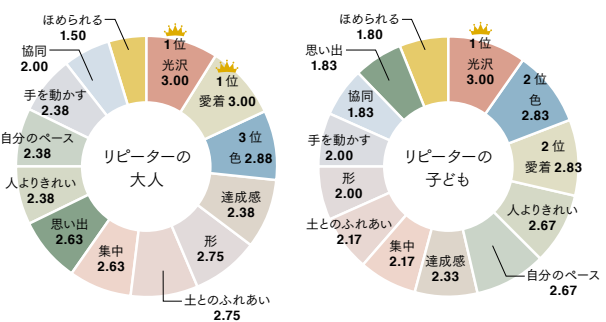
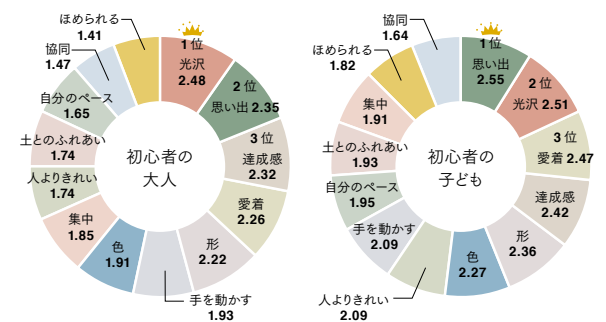
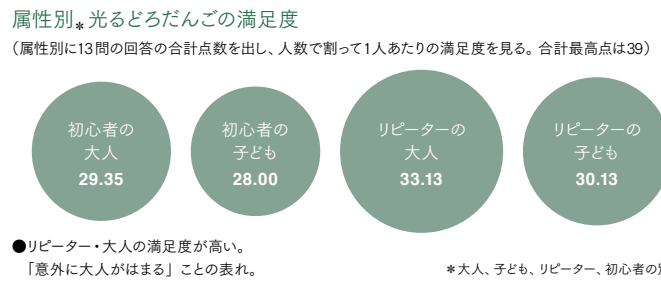


を見かけます」。

では先生、なぜ人は光るものに惹かれるのでしょうか？

「うーん、光ることの魅力にはいろいろな解釈があると思いますが、女性が光り輝く宝石に惹かれるのは、単に輝きの美しさというより、貴重な宝石を身につけることでステイタスを示すという側面があるので、ちょっと違います。光るどろだんごの場合、一つ言えるのは、もともと灰色の土なわけです。それが自らの手で光っていく。その驚きがあるんですね。特に大人は自分の持っている経験、常識とのギャップがある。価値観がくつがえってグラグラッとくる。そこに、光沢への魅力をより強く感じるのではないのでしょうか」。

「さわっていて気持ちがいい。最初、ザラザラとした土の手触りが、磨くにつれてツルツルになっていく。やればやるほどピカピカにきれいになっていく。その間、すごく集中できる。自分の世界に入れる。」  
(36歳女性 体験回数12回)



光るどろだんごアンケート  
こんな質問をしました。

Q 光るどろだんごは、なぜ「楽しい」または「魅力がある」と思いますか？  
以下に挙げる理由について、それぞれどの程度あてはまるか、0〜3の数字で答えてください。

- 1 「光沢」がきれい
- 2 「色」がきれい
- 3 「形(球型・真ん丸)」がきれい
- 4 何も考えずに集中できる
- 5 人よりきれいなだんごをつくりたい
- 6 自分のペースでできる
- 7 他人と一緒に作業をすすめられる
- 8 土とふれあえる
- 9 手を動かすことが楽しい
- 10 できた達成感が味わえる
- 11 つくったどろだんごに愛着が生まれる
- 12 つくったどろだんごを人にほめられる
- 13 思い出ができる

0…まったくあてはまらない  
1…ややあてはまる  
2…かなりあてはまる  
3…すごくあてはまる

●グラフは、各質問項目について回答(0〜3の数字)の平均値を割り出し、順位化したもの。

# 4

Feelings

## 感情

湧き上がる思い

最後のキーワードは、「感情」。

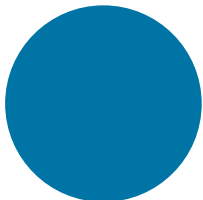
光るどころだんごづくりの制作時間は、ただか90分。しかしその過程で、人はさまざまな感情で心を満たす。「かなり楽しかった、本気になる」「全部自分でやりたい」「でき上がりをよくしたい」「自分のが一番きれいになるようにつくりたい」「つくっただんごには愛着がわく。飾っておいてもオブジェのようにきれい」とさまざまな感想が。「つくることを通して得られる感情が豊かなのも、光るどころだんごの魅力の一つ。楽しい、懐かしい、達成感、そして愛着……。特に初めて光るどころだんごづくりを体験した方たちは、そこに満足感を得ていることがわかります。来館のきっかけが「思い出づくり」という回答も多くありました」と北神先生。

アンケートからわかるのは、リピーター、初心者問わず皆さん、自分がつくった光るどころだんごに愛着を感じているということ。「むずかしい原理も

「ころだんごをつくっている間は、いろいろな感情が湧き起る。削り過ぎた時は残念に思うし、ちゃんときた時はうれしい。そんな気持ちと向き合う時間も大切。進み方も、光り方も人とは違うのがいい。ころだんごは飽きない。」

(40歳女性 体験回数5回)

なく、身の回りの材料、道具、自分の手だけでできて、なおかつ土の良さが直感的にわかる。単なる土くれがアートにも宝物にもなる、短時間でこれだけのものができるのはすごい」という声も。



光る  
ころだんごの  
魅力とは。

北神 慎司  
KITAGAMI Shinji

は ずかしながら光るころだんごについてですが、思いをめぐらせるうちに、確か、原田宗典さんのエッセイに、陶芸教室で土を練っているうちに幼い頃につくった「土だんご」の記憶がよみがえってきた、という一節があったことを思い出し、そして私自身にも「光らない」ころだんごですけれど、どろどろと戯れている幼き日の自分がいたことに、ふと気づきました。

そもそも「光るころだんご」というネーミング自体、人の心が惹きつけられる理由を含んでいるように思います。というのも「光る」と「どろ(泥)」という言葉は、意味的に相反するものだからです。このネーミングの妙が「何だろう?」「どういうことだろう?」という素朴な疑問、言わば「意外性」を生み出し、人の心を惹きつけるのではないのでしょうか。

土・どろんご館にお邪魔した時、光るころだんごをつくる「場の雰囲気」も大切なのだと感じました。その建物は土や木がふんだんに使われていて、色合いも全体的に暖色系、空間全体が温かみを持ち、訪れる人々をやさしく包み込んでいるようでした。つまり、場の雰囲気が相乗的な効果を生み出し、光るころだんごづくりの楽しさを高めているのだと思います。

今回のアンケートなどで捉えることができなかつた魅力が、光るころだんごにはまだまだ隠れていると思います。たくさんの方の魅力にあふれた光るころだんご。これは、流行やブームといった一過性のもではなく、今後も老若男女を問わず、人を惹きつけてやまない存在であり続けるのではないのでしょうか。